視察先別報告　東ティモール

（1）【技術協力プロジェクト】
東ティモール水道局能力向上プロジェクト
（2）【無償資金協力】
ディリ上水整備計画

概要

ディリ市及び地方４都市の浄水場で安全な水道水が安定的に供給されることにより、基礎的社会サービスへのアクセス改善を目標とするプロジェクト。給水普及率を、2020年までに都市人口の80%に向上させることが国家開発計画の目標として掲げられていることを背景に、浄水場の運転維持管理要員能力や水質管理システムを改善するための取り組みを実施してきた。

01　大浦　正人

設備を維持管理する為には、それが出来る人材が必要になります。技術協力という簡単な言葉では片付けられない現実を知りました。教育水準が低くて簡単な計算すら出来ません。人材育成の為には設備のメンテナンスを教える前にまず簡単な計算方法を教えなくてはその先に進みません。小林専門家は人材育成をする上で常にOJTを心がけ、言葉ではなく、態度で接しています。懸命に、少しずつ、少しずつ前に進む姿に胸が熱くなりました。支援先の中にはそんな態度の日本人に必死でついていこうとする人が出てきていると聞きました。実務がストップしたらディリ市内の人々に水が届かなくなりますが、その後も継続して支援をする約束があれば、いつまでもそれに依存し、支援という名の実務をし続けなければなりません。

02　太田原　奈都乃

水の汚濁を観察し、薬品量を決めるジャーテスト。この作業をたった２人のスタッフで毎日行い、ディリ市内約１万7000世帯に水を供給していた。また、人員・経費など未だ不十分な運営維持システムの下でも「国のため 市民のため」と苦労を惜しまないスタッフの姿が強く印象に残った。小林専門家は、現地スタッフと日々寄り添いながら技術サポートをすることで大きな信頼を得ており、現地の人々の生活を支えているのは自分と同じ日本人なのだと思うと胸が熱くなった。浄水の過程で用いられる様々な薬品が環境に悪影響を及ぼす恐れがあるという話もあった。東ティモールが誇る美しい自然を守るためにも、環境に配慮した浄水システムの構築援助が行われていくことを期待したい。

03　川辺　絵梨

「同じ目線で一緒に作業し、成果を実感してもらうことが大事」とお話ししてくださった、給水改善アドバイザーの小林専門家。また、「相手の能力や意欲に合わせ、知識や経験を伝えている」とのこと。まさに“現地の人々と共に”という日本ならではの国際協力を体現されていた。それ故であろう「小林さんを信頼している」との浄水場スタッフの声を聞くことができた。今回訪れた浄水場では、無償資金協力により行われた上水道整備を効果的に活用するための継続支援の現場を見ることができた。しかし、ディリ市の人口増加に対応できていない状況や煩雑な水道料金徴収システム等、継続して支援すべき点が残されている。故に今後は、行政の体制や制度の確立に関する支援の強化が必要と感じた。

04　木村　みゆき

プロジェクトとしては完了しているが、評価の課題を受けて行われている、施設の維持管理を視察しました。「維持管理マニュアルが活用されていないのでは」という質問に小林専門家（給水改善アドバイザー/本邦所属、千葉県水道局）は「マニュアルは分からなくなった時に必要な物で、現地スタッフと一緒に動いて同じ事を繰り返し教える事と当事者意識を持たせる事が先決である」と答えられました。技術協力ではなく公共セクターの能力向上に向けて最前線で身体を張って活動されている小林専門家の「弱者を救う水道、ボトルも買えない井戸も掘れない人達のための水道」という上水のスペシャリストとしての気概と人柄がスタッフとの信頼関係を結びつけていました。国際協力団体ではなく自治体の人が貢献している分かりやすいケースでした。

05	後藤　恵美	浄水場の視察では、千葉県水道局より派遣された小林専門家（給水改善アドバイザー／本邦所属、千葉県水道局）とお会いした。小林専門家のお話の中で心に突き刺さった言葉が２つある。１つ目は、「設備やマニュアルを整えるだけでなく、日々の業務を繰り返し一緒にやることが一番大切な役割、長い目での支援だと考え、出来るだけ現場で一緒に作業することを心がけている」という言葉。２つ目は、「安心・安全な水を届けたいという想いは、千葉でも東ティモールでも同じ」という言葉である。日本で働いていて、ある日突然上司から東ティモール行きを打診されたにも関わらず、迷わず来たのだ。様々な課題が山積する中で、このような想いを抱き、同地の発展にご尽力されていることに頭が下がる思いであった。
06	塩澄　志麻	人間が生きていくうえでとても重要な水。それが首都ディリでも給水率55％でしかない。2020年までには給水率を都市人口の80％にする目標を掲げ、月・火・水・木・金と毎日同じことを何度も何度も繰り返し東ティモールのスタッフに教える小林専門家。それは、安全な水の供給には程遠く、現地スタッフに計算のやり方から教えないといけないという現実。私と同じ立場の公務員が日本での知識や技術を活かし、日々汗を流している姿は印象深かった。この事業評価が、厳しい評価となっていることを事前に知ったが、実際に現場で働いている小林専門家の話を聞き、その取り組みにとても共感した。事業評価では伝えきれてない現場の声を私は伝えたいと思った。
07	武田　義久	首都ディリの人口約20万人で　給水率54％、10万５千人分の水を賄うために、４つの浄水場で日量約１万トン、その他に井戸が19か所あり、そこから日量２万５千トン合計３万５千トンを使用して、10万５千人分を賄っている。インドネシア占領時代から、水道は蛇口をひねると24時間出るのは当たり前といった意識はかなり低く、水に対する信頼感も低い。そのような中で、水道能力向上を意識させながら、一つ一つを、丁寧に、そして、マニュアルはできる限り使用せずに、24時間、手に手をとって職員たちと一緒に行動し、同じ目線で同じことをやってあげることが大切ですと小林専門家は言う。そして、成果が出たことを体感させる事の大切さと同時に、自立発展思考を根付かせる必要性も感じた。
08	田中　香織	専門家である小林さんの技術者としての愚直な姿勢と、「どこにいても美味しい水を飲んでほしい」という言葉が胸に響いた。小林さんは、言葉での指示やマニュアル作成だけでは絶対にだめで、相手が分かるまで一緒に作業を行うことを徹底して大切にされている。毎日全ての浄水場を回って業務にあたっているそうだ。現地職員からの信頼も厚い。見学した施設は整備されており、水質も日本と変わらないとのことだったが、東ティモールでは24時間水道が使用できる体制が整うまでは、電気料金を徴収できない仕組みになっている点には驚いた。そんな中でも、職員の方々は「国のために役に立っている」と使命感を持って働いている姿が印象的だった。日本では水道から安全な水を手に入れることは当たり前だが、実は様々な方の努力で成り立っていることにも気づかされた。
09	藤島　誠人	このプロジェクトでは、日本の水道局の方が専門家として現職で派遣されていた。とても熱心な方で常に浄水処理の技術・従業員の意識向上を考えておられた。ここでは、日本と同じ浄水処理方法を採用しており、沈殿池や砂ろ過などがなされていた。その点で日本の技術・信頼の高さを感じた。そして、ここで一番印象に残っていることは、専門家の方の言葉である。それは、「従業員の人と一緒にする」ということだ。ホワイトボードなどに書いて座学で技術を教えていくのではなく、実際に従業員と一連の作業を一緒にすることで体験的に技術を教えていきたいと話されていた。また、分からないことがあればなんでも聞ける職場の雰囲気を作っており、それにより従業員の人の意識や責任感に変化が見られたそうだ。
10	藤岡　裕巳	24時間体制で現地スタッフとともに歩みながら支援している小林専門家の姿に感動した。現地スタッフの方々からの信頼も厚く小林専門家が築きあげた絆の深さに感銘を受けた。この支援のおかげで水くみ労働が減ったのは非常に大きな成果であると思う。しかし、まだまだ水道の安全性に対する信頼は低いようなので、安心安全であることのPRが必要だと感じた。また、水道料金未納問題の根が深いことを知った。日本のように郵便のシステムが整備されていないので使用料の通知についても人の手で行っているという。小林専門家の言葉に、「本人たちと一緒にやることを大切にしている。一連の業務を一緒にやることが何よりの支援」という言葉がとても印象に残っている。物を与える支援も大切であるが、小林専門家のような、人と人が直接的につながる支援も必要であり、途上国に求められているのだと感じた。